

夫婦で不埒ふらちな関係ははじめました

プロローグ

都心から少し離れている場所にあるワンルームマンション。就職して田舎から東京に出てきた際、右も左も分からないところに不動産屋からこのマンションを勧められ、住人のほとんどが女性と聞いて即決した。

最先端に行くようなマンションではないけれど、デザイナーもオーナーも女性ということもあって全体的に可愛く、外観は白で統一されていて清潔感がある。

駅近で、利便性もいいからとても気に入っていた。だから私——藤ヶ谷希美は、五年間ずっとここに住んでいる。

「ただいま」

真っ暗な部屋に入って電気のスイッチを押すと、朝に見たままの景色が広がった。ベビーピンクとホワイトで揃えた部屋のインテリアは、我ながら女子力が高いと思う。こういう可愛い部屋に住みたくて、ネットで調べてひとつずつ揃えていったのだ。

そして完成したのが、今の部屋。誰に見せるわけでもないけど、自分は満足している。

部屋の中に入って、廊下を歩きながらストッキングを脱いで洗濯機に放り込む。部屋着に着替え、

コンタクトを外して眼鏡をかけると、髪をほどいてリラックスした状態になった。

「はあー、今日も疲れた」

洗面所で手を洗ったあと、冷蔵庫から昨日のうちに作り置きしておいたおかずとサラダを取り出す。そして炭酸水をグラスに注いだら、それらをトレーに載せて、リビングへ向かった。

リビングの真ん中にある木製のテーブルの上に食事を並べて、ご飯を食べ始める。

バラエティー番組を見てケラケラ笑いながら食事をして、そのあと九時から始まるドラマを見つつ洗濯物を干す。それが終わったら後片付けをして、冷蔵庫の中のもので簡単な作り置きおかずを作っておく。

「さて、お風呂に入ろっと」

湯船に浸かって半身浴をしながら防水のタブレット端末でネット配信の番組を見たり、本を読んだり、リラックスタイムを過ごす。いい香りのボディソープを使って入念に体を洗い、美容院で買ったシャンプーとコンディショナーで髪を洗う。

お風呂から上がって、セミロングの髪にトリートメントをしてうるおいを補給したら、お気に入りシリーズのスキンケア用品で顔と体をお手入れしてベッドに入るのだ。

そして、眠る前に毎回思うのは――

「この生活、最高っっ!!」

ひとりの時間を謳歌できるこの環境。仕事帰りに英会話やヨガに通えるし、友人と食事に行くこともできる。休日は何時まで寝ていても文句を言われず、好きな時間に起きてひとりで買い物

に行つて、たまにエステに行つてみたりして。外見だけでなく中身を磨くことも大事だ。いろいろなことを勉強して、洗練された都会の女性になるべく自分磨きに精を出す。その努力も全部自分のため。

ああ、私、自分の人生を生きてる――そう実感できる瞬間だ。

この生活にたどり着くまでには、長い道のりがあった。そしてある人のおかげでもたらされているものだと、その人物に感謝しなければならない。

この誰にも縛られない悠々自適な時間は、結婚をしたからこそ手に入れたもの。そう、私はひとり暮らしをしているにもかかわらず、既婚者なのだ。

結婚したものの一緒に住んでいない。形だけの結婚で、お互い必要なきにだけ夫婦のふりをする――そんな偽装結婚をしている。

夫とは関係が良好だが恋愛感情はない。

そんな二人にはルールがある。

必要なときだけ連絡を取る。

それぞれ別の生計を立てていて、生活スタイルは独身のときと変えない。

恋愛は自由。

もしどちらかがこの婚姻関係を不要だと思った場合は、離婚を切り出すことができる。

その場合、提案された側は、異議を申し立てず受け入れること。

そんな条件を交わして、半年前、私は夫――藤ヶ谷涼介さんと結婚した。

——この始まりは半年前。私が鈴村希美だったころ。

メールを知らせる枕元のスマホを手に取ると、まだ朝五時だった。こんな時間に連絡をしてくるのは、母しかない。

東北地方で酪農業を営む鈴村家は五時に起床して、まだ暗い時間から牛舎に向かい掃除を始める。それが終わったら餌をあげて、牛たちの体調に変わりがないかチェック。それから家族で朝食をとって、一休みしてから搾乳をする。

うちの家はそんな一日の始まりだったことを、覚醒しきっていない頭で思い出す。

『おはよう、希美。来月お誕生日ね。約束覚えてる？』

その文面を見て、一気に目が覚めた。

母は私が就職をして東京に行くことを強く反対していた。

地元の中学、高校、大学へ進学し、両親に望まれる生き方をしてきた。礼儀正しく慎ましく、決して派手にせず、家庭的な女性になるよう教え込まれてきた。

けれどそんな生活が嫌で、就職活動が始まると家族に内緒で東京に本社がある大手企業ばかり面

接を受ける。就職で家を離れるとなれば、頭の固い両親だって納得するはず。その結果、私は健康食品や医療施設向けの体組成計等を製造・販売をしている、グレハティ株式会社に就職することができた。

晴れて家を出ることになったものの、母からひとつ条件を提示された。

自由にしていいのは五年だけ。二十八歳の誕生日を過ぎたら、実家に帰ってくることに。その際、両親が見つめてきた男性と結婚するか、母が納得するような真つ当で安定した職業に就いている男性を自分で見つけて結婚するか、どちらかを選ぶこと。

その条件を呑めるのなら、家を出てもいい——そう言われたのだ。

とにかく家を出たかった私は、母の出す条件を受け入れた。条件なんて言っているけれど、五年も経てばうやむやになるかもしれないし、今とは違う状況になっているはず。都会に出て仕事をしているうちに、素敵な人と巡り合える可能性だってある。そして母の望み通り、結婚しているかもしれない。

そんな未来に胸を膨らませて家を出て、初めて手にした自由。住んでいるマンションはオシャレで、駅近で利便性がよくて、近くにコンビニがあって、夜になってもいつまでも町が明るい。

誰にも監視されることなく、時間を自由に使える。いつ出かけても文句を言われないし、門限もない。夢見ていた生活そのものだ。

そして仕事は、一生懸命打ち込んでいくうちに責任のある仕事を任せられるようになり、自分の企画したものを商品化することもできた。仕事にやりがいを感じ、自分で稼いだお金で、好きな洋服

を買って、美味しいものを食べて。欲しい知識を得るために、たくさんの場所に足を運んで、有意義に時間を使える。

自立した生活を送れる幸せ。そんな毎日がずっと続くのだと思っていたのに……
就職して丸五年経つ今年の四月から、母からのメールが頻繁ひんぱんに来るようになった。

『もうすぐゴールデンウィークだけど、帰ってくるの？』

『いい人はできた？』

『あなたの誕生日の六月までよ。分かっている？』

もしかしてうやむやになるかも、なんて甘かった。母はずっとこのときを待っていたのだ。壁にかかっているカレンダーを見て、今日が五月二十日であることを確認し、頭を抱える。

私の誕生日は六月二十日。

タイムリミットはあと一カ月。彼氏いない歴二十八年の私に、残りの一カ月で結婚相手が見つかるような奇跡など起こるはずがない。

「ああ……終わりだ」

終わりの始まりだと絶望した私は、布団を頭まで被っていつもの起床時間までふて寝した。

今日は月曜日。週頭の早朝にあんなメールを送ってこられて、気分は最悪だ。

母からのメールを無視してこのまま働き続けたらどうだろう？ ああ、だめだ。そんなことをしたら会社まで乗り込んでくるに違いない。そして今すぐ仕事をやめろと言うだろう。

会社勤めをしたことがない母にビジネスマナーなど通用するわけないし、強制送還させられてゲームオーバーになるだけだ。

そうなるくらいなら、ちゃんと一カ月前に退職願を提出して会社を去るほうがいい。一緒に働いてきたメンバーに迷惑をかけられない。今まで自分が受け持っていたものを全て引き継いでから去るのが義理だ。

「はあ」と深いため息をついて、オフィスビルのエントランスに入る。首から下げた社員証をセキュリティ端末にかざしてゲートを通る。

ライトグレーのセットアップスーツに、インナーは白のフリルブラウス。動きやすさを重視している私は、パンツスーツを好んで着ている。髪はすっきり見えるようにひとつに纏まとめて、毛先に女性らしさが出るようにふんわりと巻いてあった。

日焼けするとすぐに赤くなってしまう白い肌と、濃いアイシャドウを使うと派手になりすぎる目。鼻は平凡で、唇は顔のパーツで唯一好きなところ。薄すぎず厚すぎない感じで、いろんなリップを塗って楽しんでいる。

昔はほぼスッピンであか抜けていなかったけれど、今は違う。ちゃんとメイクをして年相応に見られるようになってきた。もうすぐ二十七歳になるし、若いだけが取り柄とらえじゃない、ちゃんとした大人の女性に見られるように心がけている。

こんなに外見に気を使っても、浮いた話のひとつもないなんて……ちょっと悲しくなってきた。

「おはようございます」

「おはよう」

私の所属するWEB開発部のフロアに入ると、後輩の西野真琴が近づいてきた。

「希美さん、今日はGAGADOの社長とお約束の日ですよね？」

「GAGADOの社長……ああ、藤ヶ谷さんね。そうだね、十時からアポを取ってるけど。それがどうしたの？」

「ああー、いいなあ……。藤ヶ谷さんと一緒にお仕事できるなんて、羨ましくすぎます……」
開口一番何を言い出すのかと思いきや、藤ヶ谷さんの話かと呆れる。

GAGADOとは、動画サイトをいくつも運営する、今をときめくIT企業、GAGADO・JAPAN株式会社のことだ。

GAGADOの社長である藤ヶ谷源介は二十代前半に会社を立ち上げ、WEBコンテンツをいくつも開発して、人気アプリを作り出した人物。

さらに料理動画にいち早く目をつけ、料理レシピや健康管理ができるようなものを制作し、もと健康管理を得意とするうちの会社の監修を受けて、爆発的な人気アプリを作り出した。

当時はグレハティにとっても、体脂肪計や体組成計と連動させてスマホで管理できるものが欲しかった時期だったし、世間で料理レシピが話題になっていたタイミングだった。

動画サイトやアプリの運営に定評のあるGAGADOと共に人気アプリを作り出したことは、大きな収益となった。

グレハティの製品も前年を超える売り上げを叩き出し、今もまだ右肩上がりだ。

私は半年ほど前からアプリ担当になり、GAGADOと毎月ミーティングを行っている。GAGADO側の制作チームと、藤ヶ谷社長、それからうちの健康管理部と私とでその月に掲載するレシピ動画の打ち合わせをするのだ。

「まあ……確かに、藤ヶ谷さんは素敵な人だと思う。でも私たちみたいな普通のOLは相手にしないんじゃないかな。もつとこう……モデルとか、芸能人とか相手にしてそうじゃない？」

藤ヶ谷源介と言ったら、セレブ特集で名が挙がるくらいの有名人。フルオーダーらしき仕立てのいいスーツに身を包み、インテリジェントな雰囲気を持ち、一目見ただけで腰が砕けてしまいそうなほどのいい男感がある。

セットされた艶のある黒髪も、きりつと男らしい目元も、高い鼻も、形のいい唇も、申し分ないほど完璧に配置されている上に、百八十センチの長身。俳優になれるんじゃないかと思うほどの端正な顔立ちをしている。

しかも群を抜いて仕事ができるハイスベックな男性だ。

仕事に対して一切手を抜かない。面倒なことでも妥協せず自ら先頭に立ってやる。この人ともっと一緒にいいものを造りたいと思わせるようなカリスマ性もある。

だからそんな魅力的な人には、すでにそのレベルの女性が傍にいると思うのだけだ。

「ですよね……激しく同意です。でも、藤ヶ谷社長に誘われたら……遊びでもいいから一晩過ごしたいです」

「こちら、朝から何を言ってるの。西野さん、彼氏いるでしょ。しかもうちの会社に」

「はは、そうでした〜」

西野さんは、ぺろっと舌を出して笑う。西野さんは、別部署の男性社員と付き合っている。それなのに藤ヶ谷さんに誘われたらついに行っちゃうなんて、けしからん。でも、そういうおちゃめなところが彼女の魅力だ。

恋愛に縁遠い私だって、社内恋愛に憧れていた時期もある。残念ながら、五年勤めているのに一度もそんなことは起きなかったけど。

「とにかく、写真撮れたら撮ってきてくださいね」

「そんなの、撮れるわけじゃないでしょ。もう」

悪びれることなく、割と本気でそんなことを言って西野さんは離れていった。

それから私は、十時からの約束までにやるべき仕事を片付け、同行するメンバーと会社を出た。GAGADOのオフィスに到着したころ、バッグに入れていたスマホが震えていることに気がついた。

母からだ。

そのまま無視しておこうと思ったが、一度コールが鳴り終わったあと、すぐまた着信が来たのでメンバーから少し離れて出ることにした。

「もしもし?」

『希美、やっと出た。朝のメールも返信ないし、何かあったのかと心配したのよ』

「ごめん、ごめん。急いでいて返信できなかっただけだよ。それより、何? 急ぎの用事でもあつ

た?」

何度も電話をかけてくるくらいだから、何か大事な用件があるのかと聞いてみる。しかし私の心配は杞憂だった。

『で、約束の日が近づいているけど、分かっている? どうせ結婚できるような相手いないんでしょ? 早くこっちに帰ってきてちょうだい』

もう二十八歳なのよ、と話は続いていく。

母の価値観は古い。最近では三十歳を過ぎてから結婚する人も多いし、二十代は自分のやりたいことをして、結婚なんてまだまだ先だと感じるような世代だ。けれど、母の感覚でいくと二十八歳は、もう結婚適齢期を逃していて、早く子どもを産まなければならぬ年齢らしい。

仕事を辞めて結婚して専業主婦になる。女性は家庭を守り子育てする。親の介護は子どもがする。こういったものを全てするのが子どもの務めだと決めつけているところがある。

話が不穏な方向に向かっている気がして、嫌な予感が胸を過る。いつもならこの辺で話が終わるのに、今日は全然止まる気配がなく、次から次へと話が続いていく。

『お母さんね、希美の結婚相手見つけてあるから安心していいわよ』

「え……? どういうこと?」

母の爆弾発言を聞いて、頭がクラクラする。私に何の断りもなく結婚相手を見つけてるなんて、一体どういうこと?

相変わず強引だと呆れ返る。

『小、中学校が同じだった、福山卓也くんって覚えてる？ 彼ね、今、地元で役所勤めをしている、真面目で立派な人なの。希美と結婚してもいいって言ってくれているのよ』

福山卓也……？

フルネームを聞いてピンとこなかったけれど、しばらくして記憶の彼方にヒットする人物が思い浮かんだ。確か瓶底眼鏡をかけて大人しい雰囲気の子だったような気がする。

あまり接点がなかったため、仲良くしていた記憶はないけれど……なぜ結婚話が出るのだろうか？ 「いやいやいや……お母さん、ちょっと待って。私……」

『待たないわ。うちを出るとき、約束したでしょう？ あなたに五年猶予をあげただけでも、お母さんは譲歩したつもりよ。いつまでも好き放題してはいけないわ』

びしやりと話を遮られる。確かにこの五年間は、自分の好きなように過ごして独身生活を謳歌してきた。

ここまで育ててもらった恩があるし、いつまでも両親を心配させてはいけないことも理解できる。だからって私の人生なのに、両親の言いなりになるのは何か違う気がする。

『とにかく、来月までだからね。七月にはこちらに帰ってくるように』

返事をしていないにもかかわらず、話は終了し電話を切られてしまった。ホーム画面に戻ったスマホを眺めて深いため息を漏らす。

「鈴木さん、もう時間ですよ」

電話を終えて茫然としている私に、同行メンバーのひとりが声をかけてきた。落ち込んでいる場

合ではない。今から大事な打ち合わせが始まるのだから集中しないと。

「はい、すぐ行きます」

スマホをバッグにしまい込み、私はオフィスの中へ向かって歩き出した。

定例ミーティングでは、来月のレシピ動画の内容を決める。そしてユーザーからの意見を取り入れたアプリの更新をお願いするのだ。

それとは別に、うちから腕時計型のウェアラブルコンピュータ——いわゆるスマートウォッチを発売するにあたっての性能の説明などを二時間にわたって詰めていく。

制作チームが話を進める中、藤ヶ谷社長も意見を出す。

「スマートウォッチの性能で血圧や心拍数を管理できるのであれば、ユーザーの血圧の異常値を感じた場合に警告し、体調の変化に気づけるようにしたいです。その際、服用や医療機関への受診を促す、緊急時には周囲に知らせるなどの機能があれば、なおいいと思うんですが、その辺り、御社はどうにお考えですか？」

「確かに、せっかくユーザーの体調を管理できるのであれば、危険を知らせる機能があったほうがいいかもしれませんね」

「そうです。この手の商品を持ちたいと思うユーザーは、健康への意識が高いですし、自身の健康状態に不安を持っていると思います。なので、危険を知らせる機能が搭載されているほうが、より購買意欲が高まるかと」

ただの健康器具の延長線になるのではなく、医療機器に近いクオリティにしたいと言う。

以降の藤ヶ谷さんの発言はどれも鋭い指摘ばかりで、「そうきたか」と納得するものだった。

さすが藤ヶ谷社長。着眼点が他の人とは違う。成功者とはこういう物の考え方をするのだと感心させられるし、知識も豊富だ。数字にもシビアで、ちゃんとした裏付けと共に、どうすれば利益が出るのかまで全て説明してくれる。

「こういう方向でいきたいと思いますが、皆さんはいかがでしょうか？」

彼は一通り述べたあと、周囲に意見を求めた。自分の意見を押し通そうとせず、それぞれの考えを聞いてくれる。そういうところも、器の大きさを感心させる。

「藤ヶ谷社長のご意見にはいつも驚かされます。敬服いたしました、さすがです」

うちの社員が、彼のすごさに心酔したため息を漏らす。

「いえいえ、もともとは御社の製品じゃないですか。素晴らしいアイデアで作り上げられたものを、よりいいものにしていくと熱くなっちゃいました」

はは、と照れて笑う姿も素敵だ。

「今ご提案させていただいたところを組み込んでくだされば、もっと素晴らしいものになると確信しています。ぜひ、お願いします」

その強気な姿勢に圧倒されると同時に、尊敬の念が湧いてくる。この人と一緒に仕事ができたら、もっと新しい世界が見られるような気がする。

でも——その藤ヶ谷社長とも、もうお別れかと思うと寂しくなってしまう。

無意識に彼のほうを見ていると、顔を上げた藤ヶ谷さんと目が合う。にこっと微笑みかけられて思わず赤面してしまった。

わ、わわ……！ なに、あの素敵なスマイルは。美男子の微笑みがこんなにも胸に刺さるなんて知らなかった。挨拶程度に微笑みただけなのに、心臓の音がうるさく鳴る。

藤ヶ谷社長が、女性からの人気が高いことも納得できる。藤ヶ谷社長に微笑みかけられたなんて、西野さんに知られたら怒られそうだ。

ミーティングが終わると、うちの健康管理部のメンバーは次のアポが間に合わないので急ぐと言って出ていった。私はこのあとの予定はないので、ひとりで片付けをする。

すると藤ヶ谷さんがこちらに向かって歩いてきた。

「鈴木さん、このあとご予定は？」

「特にありませんが……いかがされましたか？」

「もしよければ、一緒にランチでもいいかがですか？　鈴木さんともう少しお話ししたくて」

まさか藤ヶ谷さんに誘ってもらえるなんて思っていなくて驚いた。仕事の話をもっとしたいのだと思い、急いで首を縦に振る。

「はい、行きます。お誘いありがとうございます」

仕事熱心な人だ。ランチミーティングをしようと思うくらい、うちのアプリに関心を持ってきているということなのだろう。グレハティとしてもGAGADOの力は必要不可欠なので、この関係を大切にしなければならない。

なのだけど……ランチミーティングなので向こうの制作チームも一緒かと思っていたのに、レストランに案内されたのは私ひとりだった。

「あの……他の方は……？」

「ふたりきりですよ」

ええ……っ、ふたりきりなの？

まさかそんなことになるとは思わず、気軽に返事してしまっただけよかったのだろうか。

連れて来られたのは、ビルの最上階に入っている高級なフレンチレストラン。ドレスコードがありそうな場所だけど、スーツだからセーフだろう。

男性と接する機会が少ないから、こんな素敵な男性とふたりきりで食事なんて緊張してしまう。失礼なことをしてしまわないよう気を引き締めなければ。

「さ、座って」

「失礼します」

案内された席は、窓際の半個室。窓からは東京の街並みが一望できる、とても開放的でいい席だ。

「鈴木さんは、何か食べられないものはありますか？」

「大丈夫です。苦手なものはありません」

「そうですか」

藤ヶ谷さんはおすすめのものをオーダーし、緊張している私に気を使わせないように配慮してくれた。

ああ、もう。どこまでスマートなんだろう。女性の扱いも、話も上手。レストランの華やかさに負けないくらいの色気があって絵になる。

「鈴木さんと一緒にお仕事をするようになって、半年ほど経ちますね。いつも食事に誘いたいなと思ってはいたんですけど、皆さんと一緒になのでなかなかチャンスがなくて」

お世辞でも、そんなふうに言われたら胸が跳ねる。思わず顔が緩んでしまいそうになって少し俯く。

「僕、鈴木さんの仕事に対する姿勢が好きなんです。周りに対して何を求められているのか、先回りして考えて動いていますよね。それから、こちらの要求にすぐ応えられるように抜かりなく準備している。なかなかここまでできる人はいませんよ」

「いやいや……。藤ヶ谷さんは、私のことを過大評価なさっています」

以前アプリで、ある一定のスマホの機種に対してバグが生じたことがあった。その報告をした際、詳細を述べると共に、その機種を準備していた。社内ではそこまでしなくてもいいのではという声もあったが、藤ヶ谷さんはきつと自分の目ですぐ確かめたいだろうと思ったので持つていくことにしたのだ。

それ以外にも、彼が指摘しそうなものを予測して、ある程度準備してミーティングに臨んでいたので、きつとそれを評価してくれたのだろう。

「そんなことない。鈴木さんはとても優秀な方だ。うちの会社に来てほしいくらいです」

「そんな……」

「まあ、懇意こんいにしていただいているグレハティの社員さんをヘッドハンティングなんてしたら、関係が悪化してしまうので、実際にはできませんが。でも、鈴木さんが欲しいのは本当ですよ」

その色気あふ溢れる声で「欲しい」なんて言われたら、舞い上がってしまいそうになる。あまりの刺
激的な状況に胸の鼓動がバクバクとうるさい。

こんなにドキドキさせられるなんて初めての体験だ。

恥ずかしさで縮こまっていると、前菜が運ばれてきた。顔を上げると、藤ヶ谷さんがこっと微笑みかけてくる。

「食べましょうか」

「はい」

こんなにお淑じとやかになるなんて、いつもの私じゃないみたい。男性の同僚と食事をして、照れることなんてないのに。

「そうだ。来年、新しいSNSを発表することになりそうなんです。サンプルが出来上がったら、すぐにお見せします。というか、やはりこれも鈴木さんが開発チームに入ってくれたらな……なんて思ってしまうんですね」

そんなことはできないと分かりつつも、GAGADOに来てくれたらと思うてくれていることが伝わってくる。こうして必要とされていることが純粋に嬉しい。

けれど来年のことを考えたとき、きつとここにはいないだろうと想像して気分が沈む。

「ありがとうございます。ぜひ見せていただきたいですが……私、来月で退職するかもしれないん

です」

「え？ どうしてですか？」

藤ヶ谷さんはナイフとフォークを持ったまま、固まってしまった。眉間に皺しわを寄せて、その理由を話してほしいとじっと見つめられる。

「両親に実家に戻って来いと言われていました……」

「ご両親に何かあったんですか？」

両親が病気で看病しないといけないだとか、そういうことを想像したようで、藤ヶ谷さんは心配そうな表情を浮かべる。

「そうじゃないんです。私の実家は少し変わってしまっていて……」

「それは、どういう……？」

一瞬躊躇ためらうものの、藤ヶ谷さんから「理由を聞きたい」とストレートに言われ、話を続けた。

「私の実家は、すごく田舎いなかにあるんです。山の奥で、家と家との間も、すごく離れている感じのコンビニなんかはないし、スーパーだってない。食材は移動販売のおじさんが車で売りに来るときに買う、みたいな場所です」

藤ヶ谷さんはお皿の上にナイフとフォークを置いて、静かに私の話に耳を傾けている。

「悪いところじゃないんです。自然が溢あふれているのだから、そういう人里離れた田舎いなかが好きて方もいると思います。でも私は都会あひかに憧あこれがあつて、一度でいいから住んでみたかった。家を出られる理由は就職しなくて、東京に本社がある会社を受けました。それで受かったのがグレハティ

でした」

それでも両親は猛反対。山奥の田舎に住んでいる世間知らずの年頃の娘が、都会でひとり暮らしなんて危険だと。悪い人にそのかさされて転落していくのではないかと心配された。

「でも大手に就職できたし、今まで一生懸命勉強してきたのも、このためなんだって説得しました。そして折れた両親は、条件を出しました」

自由にしていいのは五年だけ。二十八歳の誕生日を過ぎたら、実家に帰ってくることに。その際、両親が見つけてきた男性と結婚するか、母の納得するような職業に就いている男性と結婚するかのどちらかを選択しなければならぬのだと藤ヶ谷さんに話した。

「それで……帰るんですか？」

「はい。結婚できるような相手も見つかりませんでしたし、約束の五年が終わります。これ以上私の我儘を押し通して両親を心配させるわけにはいきません」

本当はこのまま東京にいたい。今携わっている仕事も最後まで見届けたいし、これからやりたいこともたくさんあった。それを諦めて帰ってしまうのは惜しい。

「五年もあれば、結婚を意識できるような男性に出会えると思っただけ……ダメでした。そんなことだろうと予測していたようで、親は勝手に許婚を見繕っていました。さすが親です、私のことをよく分かっていますね」

重くなった空気を和ませるように笑ってみせるけれど、藤ヶ谷さんは全く笑ってくれない。むしろ難しい顔をしたまま、何かを考えているようだ。

「鈴村さんは、気になる人や、好きな人はいないんですか？」

「いませんね……。そもそも、私、男性のことがよく分からなくて」

「よく分からないとは？」

今まで男性と深く付き合ったことがないことももちろんだが、男性の不可解な行動を目にするたび、理解に苦しむことがあった。

「例えば……友人の彼氏が浮気をしていたという話を聞いたとします。どうして彼女がいるのに浮気をするんでしょうか？ まあ……女性側がすることもありますが、圧倒的に男性の浮気の話が多い気がします。それから——」

仕事上の付き合いがある他社の執行役員の方がいた。その男性は五十代くらいの既婚者のおじさまだったのだが、なんとその人に交際を申し込まれたのだ。

「どうして奥さんや子どもがいるのに、私と交際しようと言えたのでしょうか？ 理解できません。どういう思考でそうなったのか……答えが見つからないんです。それから——」

大学時代には、いいなと思う男の子に意地悪をされたり、一緒に遊ぼうと約束していたのに、直前になって男友達と遊ぶからとドタキャンされたりした。

私と付き合い合ってもいないのに、体の関係を結んだと嘘をつかれたこともあるし、謎な行動ばかりだ。

「だんだん男性のことが分からなくなってしまつて……。最近は別次元の生き物なんだなって割り切っています。だから好きになれないのかもしれないかもしれません」

数々のエピソードを聞いた藤ヶ谷さんは、真顔で何かを考え込んでいるようだ。こんな話を聞かされて気分を害したかもしれない。

「すみません。こんな話つまりらないですよね……」

「……鈴木さん、いい考えがあるんですが」

「はい。何でしょうか？」

何か打開策が閃いたのかな、と返事をする。すると、藤ヶ谷さんは真剣な面持ちでじつと私を見つめた。

「僕と結婚しませんか？」

「……………は？」

「すぐに結婚しましょう」

いやいやいやいや……っ。真面目な顔をして、急に一体何を言い出すの！

目が点になってしまつて、返事ができない。

「僕のこの行動も不可解に見えるでしょうが、その理由は今からお話しします」

「は、はい……」

突拍子もなく結婚の話が出てきて、これまた男性の不可解な行動を目の当たりにして驚いた。けれど、藤ヶ谷さんはこれから理由をちゃんと話してくれるというので、まずはそれを聞こう。

「僕も今年で三十歳になります。そろそろ身を固めたいと思うようになってきました。それと、鈴木さんの家ほどではありませんが、親から結婚はまだなのかと言われるようになってきたんです

よね」

どこの家も同じなんだなと心中を察する。藤ヶ谷さんのご両親も、いつまでも仕事ばかりしている息子を心配し、いい人はいないのかと心配して聞いてくるらしい。

「別に焦るような年齢ではありませんが、両親は早く結婚して落ち着くことを望んでいるようです」

「藤ヶ谷さんなら、引く手あまたなんじゃないですか？」

高学歴で仕事で成功を収めているだけでなく、見た目も完璧。非の打ち所がない人だから、素敵な女性が寄ってくるに違いない。わざわざ私を指名しなくても、相手に不自由していいと思うけれど。

「引く手あまた……。はは、そんなふうに見えますか？」

「はい。とても素敵ですし、てつきり恋人がいらっしゃるのかと」

「いえいえ。確にお付き合いしている人がいた時期もありました。しかし仕事が忙しいと、どうしても後回しになる。そうすると相手の方とのバランスが崩れてしまつて……うまくいかない」

藤ヶ谷さんのことが好きゆえに、もっと会いたい、もっと構ってほしいと怒つてくるという。それ以外にも、GAGADOの社長という肩書に惹かれてお付き合いを迫られることも多いそう。

「肩書やお金目当てで近づいてくる人も結構いるんですよ。しかもこちらの都合や気持ちなどを考えずに、強引な手で迫られる。そんな女性を寄せ付けないようにするのに手を焼いているんです」

「へえ……。そうなんですか」

世の中にはハニートラップを仕掛けたり、当たって碎ける精神でガンガンと攻めてきたりする女性がいるらしい。きつと、その女性たちもそれなりのスペックで、藤ヶ谷さんに選んでもらえる自信があるがゆえの行動だろう。

「僕の仕事の邪魔になるだとか、突然押しかけてきて迷惑だとか考えない人がいて。ああいうのを見ていると、本当に疲れる」

トラブルにならないよう配慮してはいるが、それでもそういう人が何人もいるものだから困り果てているらしい。モテる人だけが知る悩みだと感心する。

「だから、結婚をしてみれば、そういう女性たちを牽制^{けんせい}することができる。僕にとってもメリットは大きいんです」

「いや……でも……さすがに私と藤ヶ谷さんでは、釣り合わなくないですか？」

眉目秀麗^{ひびせうれい}な藤ヶ谷さんの隣に一般人丸出しの私。ずば抜けて美人つてわけでもないし、すぐれた才智があるわけでもない。どう見ても訳アリで結婚したとバレしてしまうような、不釣り合いなふたりだ。

「そんなことないですよ。鈴木さんこそ、僕のことを過大評価^{かくだいひやうか}しすぎです。そんなに崇^{あが}めたてないでくださいよ。僕は、そこら辺にいる男と同じですから」

「いやいやいや……そんなことはないでしょう」

清潔感^{せいせつかん}があって、俳優さんにも負けないくらい^{うつく}の麗しい容姿^{ようさ}をしている藤ヶ谷さんが、その辺りにいる男性と同じわけがない。

セレブ特集でテレビに出ているとき、華やかな芸能人の傍にいても全く劣らないのだから。

「とにかく、僕にとつても結婚はメリットが大きいです。ただ籍を入れるだけでいいし、夫婦生活を共にしなくていい。お互いに今住んでいる場所に住みながら、必要なときだけ夫婦の役割を果たす——というのはどうでしょう？」

「必要なとき……だけ？」

「そう」

例えば、社長夫人として参加しなければならない場面や、友人との集まりで妻として紹介されるときに一緒に行くだけでいい。冠婚葬祭や、実家に帰省するときを含めても、一カ月に一度あるかないかくらいの頻度だという。

「そのとき以外は、お互いに自由にしています。連絡だつて密に取らなくていい」

「自由……」

その言葉にぐらりと揺れそうになる。とはいえ、何度も顔を合わせてはいるものの、プライベートをあまりよく知らない相手と結婚だなんてあり得ない展開だ。

しかしきちんとした職業に就いている藤ヶ谷さんと結婚すれば、両親は納得してくれるに違いない。

その上、今まで通りの生活を送っていいと言われている。これつて予想を上回る好条件ではないだろうか。

「だから、僕と結婚してください。鈴木さんとなら、いいパートナーになれると思うんです」

まっすぐに見つめられて、一瞬息をするのを忘れる。

思わず「はい」と言ってしまうようになったところで、理性を奮い立たせてブレーキをかけた。こんないい条件で、こちら側に何もデメリットがないなんてことがあるんだろうか。

ただより高いものはないということわざがあるくらいだから、何か重大な秘密が隠されているかもしれない。

ここは一旦冷静になって相手を見極めないと。

「申し訳ございません。とてもいいお話ですが、即決できかねます」

「鈴木さん……」

「親身に聞いてくださって、ありがとうございました。ご提案いただけただけで幸せです」

偽りの夫婦であったとしても、誰もが憧れる藤ヶ谷さんに結婚を申し込まただけで、一生分の運を使い果たした気がする。それくらい尊い出来事だった。

感謝の気持ちを込めて、深々と頭を下げる。

「僕は本気です。前向きに検討をお願いします」

顔を上げて彼の顔を見ると、再びまっすぐに見つめ返されてしまった。戸惑うあまり返事をしなかったものの、「また連絡します」と言い切られてその日は別れた。

「本気なのかな……」

帰社途中の電車の中で、「僕と結婚しませんか？」と言われたときのことを思い出し、顔から火を噴きそうになる。心のこもったプロポーズをするみたいな真剣さで、全部投げ捨てて捧げてしま

そうになるほどの凄みがあった。

あんなふうに男性から迫られたのは、初めての経験だった。

「格好よすぎた……。はあ……」

それだけで充分だ。これ以上何を望むというのだろう。東京土産としては、とてもいいものをもらった。もう思い残すことはないと思っていたのだが――

その数日後。

残業を終えて会社の外に出ると、遠くから男性が駆け寄ってきた。

「す……すつ、鈴木希美さんですよね？」

「……は、はい」

百六十センチの私と同じくらいの身長で、ふくよかな体形をしている男性。肌は白く、口の周りには青い髭のあとが見える。指紋で汚れた眼鏡をしていて、一重の瞳が揺れながらこちらを見ていた。汗をかいているのか、少しウェットいな前髪を鬱陶しそうに押さえながら、私のほうに大きく一歩近づいてきた。

「僕、福山卓也です。……あなたの許婚の」

名乗られて、母からの話が頭に思い浮かんだ。私のためにいい人を見つけたと言っていたが、それが今日の前にいる男性のことなのか。

「い、許婚って……それは、親が勝手に言っているだけで……」

「僕はそれでいいと承諾しています。あとはあなたが地元に戻ってくるだけですよ」

薄ら笑いを浮かべる不気味な男性に怯おそんでしまう。この人が私の結婚相手だなんて、にわかには信じられない。というか、信じたくない。

「どうしてここにいらっしやるんですか？」

「ええと、東京で研修がありまして、それでこちらに来た次第であります。もしよければ、希美さんの家に泊めていただこうかと」

「ええ……っ」

それに關しては、うちの両親の承諾を得ていると胸を張って言われてしまった。

「お断りします。男性を家にあげたことなどありませんし、急に言われても困ります！」

「いいじゃないですか。僕たちは結婚する仲でしょう。順番が逆になっても問題はないかと」

何の順番だ、と怒りそうになる。天地がひっくり返っても、この人とそういうことをするつもりはない。彼が私の手に触れようとしたので、さつと腕を引つ込めた。

「今日のところは突然だったので、予約しているホテルに行くことにします。しばらくこちらにいますので、心の準備ができたら呼んでください」

そう言つて、彼は自分の電話番号が書かれたメモを手渡してきた。連絡などしないので受け取らないでおこうと思つたのに、すでに私の番号は母から聞いて把握していると言われてしまった。

「じゃあ、また。今夜、メールを送りますね。おやすみなさい」

嬉しそうに手を振つて去つていくのを見送つたものの、顔の引き攣ひきつりが収まらない。

何なの、今は……

突然現れて、結婚する気満々じゃない。しかもいやらしい想像をしていますと言わんばかりに、体を上から下まで舐めるように見ていた。

あの人が私の将来の夫……。そう考えるだけで寒気がする。

とはいえ、外見だけで決めるのはよくない。母が選んだ人だから、尊敬できるような素晴らしい人なのかもしれないと考えてみたものの――

その夜以降、彼からメールがじゃんじゃん入ってくるようになった。私の返事がなくても気にしていないようで、自分語りが続々と続く。

彼は昆虫が大好きで、あらゆる虫の生態を調べるのが趣味らしい。休みのときは、日本に生息していない昆虫を海外まで見に行ったり、東京でしか開催されない昆虫展に足を運んだりと忙しく過ごしているらしい。

その上、その写真を何枚もメールで送ってくるのだ。綺麗なものもあれば、グロテスクな形状の虫もいて、メールが届くたびに恐怖心が煽煽られる。

「もう、やだ……」

一日に何回も送られてくるメールのせいで、ノイローゼになってしまっそう。工作中、スマホの電源を落としてデスクに頭を突つ伏した。

相手に自分のことを知ってもらうのは、とても大事なことだと思つ。これから夫婦になつて一生付き合っていくのなら、なおのこと。それは理解するけれど、内容がへビーすぎてついていけない。

しかも、困るのは返事だ。マニアックな昆虫の話がほとんどで、こちらとしては全く興味がないのに、相手をないがしろにすることもできず、当たり前障りのない返事をする。

そうすると、興味を持ってくれていると勘違いされて話が止まらなくなっていくという、負のスパイラルに巻き込まれるのだ。

「どうすればいいの……」

しかもそれだけではない。福山さんとメールのやり取りをしているうちに、いくつか昔のことを思い出した。

それは中学時代のこと。ある日、私の体操服が一枚紛失してしまった。

友達の間違って持って帰ってしまったのかと思っていたが、一向に出てこない。道端で落とすなんてことも考えにくいし、誰かに盗まれたのではないかとクラス中がザワついた。

そうして犯人が見つからないまま数カ月経過したころ、福山くんのお母さんがうちを訪ねてきた。紛失していた私の体操服が彼の部屋から出てきたのだそう。彼の持ち物に紛れ込んでいただけだと説明されたが、わざと持って帰ったのではないかと疑った。手元に返ってきたものの、気味が悪いのでその後使用していない。

女子の体操服を持ち帰って何がしたかったんだろう？ もしかして女装したかった……？

そうだ、福山くんは、女装趣味があるのかもしれない。昆虫マニアの女装趣味。なかなかハードな人だと頭を悩ませる。

結婚する前から性格の不一致、価値観の違いを感じている状態で、いい夫婦関係を築けるとは思

えない。

彼のことを全て知り尽くしているわけではないし、全否定するつもりはないが、スタートラインの状態でこれだけ大きい不安があるのだ。

「はあ……」

今月もあと数日で終わる。

月末までに退職願を提出しないと、来月いっぱいまで退職するのが難しくなってしまう。

でも私……このまま福山さんと結婚できる？ うまくいかなそうな相手と結婚して、この先何十年も一緒に過ごせるのだろうか。今まで生きてきた以上の年月を彼と過ごしていく未来が想像できない。

どうすればいいのだろうと頭を悩ませていると、デスクの上に置いてある固定電話の内線コールが鳴った。

「……はい、鈴木です」

『GAGADO・JAPANの藤ヶ谷さまがお見えです。お通ししてよろしいですか？』

受付からの電話で、現実を引き戻された。藤ヶ谷さんと特に約束はないのに、どうしてうちの会社に来たのだろう。不思議に思いながら、通してもらおうように伝える。

オフィスフロアの近くにあるエレベーターの前で待っていると、扉が開き、藤ヶ谷さんが降りてきた。

「すみません、約束の時間より早く着いてしまいました」

「約束……？」

今日は藤ヶ谷さんと約束はしていなかったはず。思い当たる節がなくて考え込んでみると、藤ヶ谷さんが話を続けた。

「一時間ほど前に、電話を入れて伝言を頼んでいたのですが……もしかして伝わっていませんか？」

私が離席しているときにアポを取っていたらしい。

そうだよ、藤ヶ谷さんが連絡もなしに突然来訪するわけない。電話を受けた者が私に伝えるのを忘れていたのだろう。

「伝達ミスで申し訳ございません」

「いえいえ、こちらこそ急だったので申し訳ありません。用件は先日いただいていたアプリの更新のことです。メールだと伝わりにくいかと思ったので、直接お話ししようと思って」

「そうだったんですか。どうぞこちらへ」

ふたりでミーティングルームに入り、さっそく仕事の話に入る。資料に目を通しつつ、実機を見ながら問題が改善されたアプリを触らせてもらった。

こちらの希望通りに変更されていて、問題なくスムーズに使えるようになっていた。

——突然来られたから、結婚の話の続きなのかと思つて緊張したけど……ちゃんと仕事の内容だった。私つてば、何を考えているんだか。

勤務中にプライベートな話をされるわけがない。相手はGAGADOの社長だし、忙しい人だ。

分単位でスケジュールをこなしている方が、わざわざそんな理由で訪ねてこないだろう。

それにあの日、即決しなかったので、もうなかったことになっているのかもしれない。

ちよつとがっかりしている自分がいて、困ってしまう。余計なことは考えないようにしようと、気持ちを切り替えて仕事モードに戻る。

「早急に対応をしていただき、ありがとうございます」

「いえいえ。それに鈴木さんの顔も見えたかったので」

「え……」

にこつと微笑みかけられて、藤ヶ谷さんとの結婚話がまだ進行中であることを察した。もうその話はされなれないと思つていたから、つい頬を熱くしてしまった。

「あれ？ いい反応。喜んでくれましたか？」

「い、いいえ！ そんな、別に、私は……！」

「はは、冗談です。大事な用件がもうひとつ。先日の話について、追加でお伝えしておきたいことがあるんです。でもここでは難しいので、このあと一緒に食事に行きませんか？」

福山くんのもので悩んでいたあとだからか、藤ヶ谷さんが輝いて見える。この人は救いの手を差し伸べてくれる神様なのかもしれない。

「はい、分かりました」

「よかった。じゃあ、仕事が終わったら連絡ください」

どこまでもスマートで、好感度が上昇していく。こちら側が重く感じないようにさり気なく、で

も男らしく押ししてくるところが格好いい。こんなことをされては、女性は本気になってしまう。

だから藤ヶ谷さんの周りには、どうにかして彼と付き合いたいと願う女性が後を絶たないのだ。用件を済ませた彼を見送り、遠くなっていく背中にもぼつりとつぶやく。

「罪人だ……」

藤ヶ谷さんの悩みごとに真実味は感じられたので、彼は彼なりに本当に悩んでいるのかもしれない。そうなれば、私たちの利害は一致している。

お互いに自由でいたい、誰からも束縛されたくない、結婚しなさいと言われるのが嫌だ——それを回避するために偽装の結婚をする。結婚をしたあとでも別居のまま、必要なときだけ一緒にいる。

実家に強制送還させられることもないし、福山さんと結婚しなくていい。今の仕事も続けられる。考えれば考えるほど、これって最高の条件じゃない。

今夜話し合って、最終決断を下そう。定時まであと二時間。早急に仕事を片付けて彼のもとへ急いだ。

待ち合わせは、オフィスビルから少し離れたお店の前。約束の時間までまだ余裕はあるけれど、待たせてはいけないと足早に歩く。信号待ちで足を止めたところで、誰かに肩を掴まれた。

「お疲れさま、希美さん」

「福山くん！」

どうしてこんなときに現れるかな、と顔を引き攣らせる。

「今日はお出張最後の夜なんです。明日の朝一で向こうに帰るつもりです」

「そうなんです。気をつけて帰ってください」

早々に話を断ち切って藤ヶ谷さんのもとに向かいたいのには、彼は話を続ける。

「今日を逃せば、しばらく会えなくなる。だから今夜は一緒に過ごしましょう。僕たち、お互いをもっと知るべきです」

「え、ええ……っ!？」

福山くんに手首を掴まれて、逆方向に引つ張られる。彼は信号待ちをしている人たちをかき分けて、ぐいぐいと私を引つ張ったまま歩き始めた。

「ちょっと待ってください。私、今から約束を……」

「僕とは今日しか時間がないんですよ。優先してください」

「でも！ あちらが先約ですから」

振り払おうとしても、男性の力には敵わない。福山くんは一見大人しそうに見えるのに、強引なところが見え隠れしている。それがすごく怖くて何をされるか分からない不安が胸を過る。

「今日、何度かメールしたのに、無視しましたね？ 忙しかったんですか？」

腕を掴んでいる手に力が籠り、怒っていることが伝わってきた。

「はい。仕事中に何度もスマホを触れません、から……」

「そうですか。真面目なんですね。でもこれからは、まめにチェックしてください。旦那からの連

絡は最優先事項ですよ」

この人が旦那になるなんて、絶対に嫌だと思つた瞬間だった。社会人なら、仕事中にすぐに返事できないことくらい理解できるはずだ。なのにそれを許さないなんて……

振り解こうとしても、彼の手から逃げられない。手首を掴んでいる彼の手は、強く力を込めているようで痛くてたまらない。

このままどこかに連れて行かれるのではないかと怯えていると、福山くんの手首を誰かが掴んだ。

「すみません、彼女を離してください」

「な、何なんですか、あなた……」

福山くんと私の間に入ってくれたのは、藤ヶ谷さんだった。待ち合わせの付近だったので、私に気づいてくれたのだろう。

毅然とした態度で、福山くんに私の手を離すように促す。藤ヶ谷さんが強く手首を掴んでいるのだから、福山くんは渋々私の手を離れた。

「藤ヶ谷さん……!」

「大丈夫?」

「は、はい……」

手を掴まれただけで、それ以上のことはされていないけれど、すごく怖かった。見れば、先程まで掴まれていた場所がうっ血して色が変わっていた。それを隠すように反対の手で覆う。

福山くんは突然現れた藤ヶ谷さんに嫌悪感を抱いているようで、敵意に向けた視線を送ってくる。

「あなたは何なんですか? 希美さんと僕の仲を邪魔するなんて」

「俺は彼女の婚約者です。あなたは?」

「僕は希美さんの許婚です。婚約者って……一体何なんですか!」

先日藤ヶ谷さんに、親に決められた相手と結婚させられそうだと伝えていたので、この人がそのなかと察してくれたらしい。藤ヶ谷さんは私を守るために、婚約者だと言ってくれたのだ。

私も藤ヶ谷さんに乗っかって演技をしよう。それなら、この場をうまく切り抜かれるような気がする。

「福山くん、ごめんなさい。私、この人と結婚したいの。あなたとは結婚できません」

「なんで……?。僕はあなたの両親が認めた許婚なんですよ? 絶対に僕と結婚するべきだ」

大声を上げてヒステリックになる福山くんが怖くて、藤ヶ谷さんの体にしがみつく。

「申し訳ないが、俺たちは愛し合っているんです。離れるなんて考えられない」

「希美さん、嘘でしょう? 嘘だと言っ……!」

私と藤ヶ谷さんは隙間のないほど体を密着させ、愛し合う恋人のように振る舞う。

「ごめんなさい。私……藤ヶ谷さんとじゃなきゃ嫌なんです。彼と結婚したい」

「そんな……」

人目も気にせず福山くんがへにやりと地面に座り込む。ぶつぶつと何かを言いながら、シヨックを受けているようだったが、藤ヶ谷さんは今がチャンスだとアイコンタクトを送ってきた。

「じゃあ、俺たちは失礼します」

再び逆上したら長引きそうなので、藤ヶ谷さんは私の手を引いてその場を離れた。

ここまで来ればもう大丈夫だろうというところで足を止める。藤ヶ谷さんが来てくれなかったら、どうなっていたことだろう。

「ほんつとうにありがとうございました！」

藤ヶ谷さんに深々と頭を下げる。すごく怖かった。不安でいっぱいだった。だけど、藤ヶ谷さんが来てくれて本当によかった。

「あの人が鈴木さんの結婚相手だったんですね。あんな危ない人と結婚なんて……怖かったでしょう」

「藤ヶ谷さんがすぐに来てくれたから平気でした」

掴まれていた手首の痛みがまだ引かない。青紫に変色してしまったところを見ただけで、さっきの恐怖が蘇る。泣きそうになるのを堪えて、気にしないように振る舞う。

だけど、福山くんはもういないから大丈夫だと思うのに、体の震えが止まらない。鎮まれと言いつても、全然収まらない。でもそれに気づかれたたくなくて笑顔で誤魔化した。

「我慢しないでください。あんなふうにされて怖くないはずがない。おいで」

切なそうな表情を浮かべ、藤ヶ谷さんは私の体を引き寄せる。大きくて温かな体で私を包み、大きな手で頭を撫でてくれる。もう大丈夫だよ、と言いつけさせるようにぎゅつと強く抱き締められた。

「もっと早く見つけていれば、こんなことにならなかったですよ。すみません」

「藤ヶ谷さんは……悪くないです」

ああ、だめだ。こんなふうに優しくされたら、涙が堪えられなくなる。ぼろぼろと涙が零れて、彼のスーツに染み込んでいく。それが申し訳ないと思うのに、彼のぬくもりが心地よくて離れられない。

「もう大丈夫ですよ」

「……はい」

今まで感じたことがないような安心感。男の人に守ってもらうなんて初めてだけど、こんなにも安心できる。この人の傍にいれば大丈夫なんだと心から信頼できる。

私……この人となら……

顔を上げると藤ヶ谷さんと視線がぶつかる。涙を流している私に気がつき、彼はそつと手で拭ってくれた。

「私……藤ヶ谷さんと結婚したいです。藤ヶ谷さんのいいパートナーになってみせます。だから……」

お互いの利害を一致させるための夫婦。お互いに干渉しない、必要なときだけパートナーとして振る舞う。

「結婚の話、お受けします」

「よかった。じゃあ、きちんと契約書を作りましょう。お互いに納得できるベストな条件で、婚姻契約を結ばないと」

「はい」

藤ヶ谷さんは私を福山くんから守ってくれた。そして私の望みの生活を送るため、籍を入れてくれる。それってすごいことだ。

だったら私も……。彼の求めているクオリティの高いプロ妻として完璧に^{こた}応えてみせる。それが私の責務。

こうして私たちはそれぞれの条件を承諾して、結婚することになった。

2

そうして、私は藤ヶ谷希美になった。

結婚を決めたあとすぐにお互いの両親に挨拶をして、結婚を認めてもらえた。申し分ない相手連れてきたと、うちの母は大喜び。福山くんとの結婚話は、少し揉めたいが口約束だったということもあって無事解消できたのでよかった。

九月には田舎の親戚一同を呼ぶ大がかりな結婚式を挙げることになり、うちの地元で一回、友達や会社関係の人たちをメインに東京で一回、計二回披露宴を行った。

本当の夫婦じゃないことが申し訳ないくらい豪華な式で、和装洋装共に花嫁衣裳を着ることができた。もう思い残すことはないほど、素敵な結婚式だったと思う。

それから半年。現在の生活はというと、以前から住んでいるマンションにひとりで住んでいる。両親には、藤ヶ谷さん——涼介さんの仕事の都合で東京に拠点を置かなければならないからと言って、都会暮らしを継続できることになった。

仕事もそのまま続けているものの、GAGADO担当からは外してもらった。公私混同はしないつもりだけど、夫婦で一緒の仕事をしていると周囲が気を使うだろうと見越して。

後輩の西野さんからは「藤ヶ谷さんと結婚なんて、羨ましすぎ！ ずるい！」と何度も泣き言を聞かされるはめになった。

いやいや、西野さんには素敵な彼氏がいるじゃない。私なんて……涼介さんと結婚したとはいえ、一緒に住んでいるわけでもないし、愛し合っているわけでもない。業務的な連絡をするくらいで、それ以外は独身のときと同じだ。

周囲からは「どうやって付き合うことになったの？」と経緯を聞かれまくった。仕事上の付き合いがあったとはいえ、普段の様子から私たちが恋愛に発展するなど思ってもみなかったのだろう。

『会うたびに藤ヶ谷さんから猛アプローチされて、付き合い始めた。一緒にいるうちに自然と結婚を意識するようになり、プロポーズされた』

私たちは事前に打ち合わせて、ふたりの馴れ初めについて決めておいた。愛され婚をしています、ということを大々的にアピールして、私たちが偽装夫婦だとバレないように振る舞うのも忘れない。その甲斐あってか、私たちが別居していることすら誰ひとり気づいていない。

どれもこれも皆、涼介さんのおかげだ。彼には頭が上がない。

密に連絡を取り合うことはないが、彼への感謝の気持ちは忘れず、一日一回は「ありがとうございます」と念じるようにしている。

そして時間のあるときは、涼介さんのお母さんに会いに行き、お話をしたり一緒に食事をとりしている。こんなに素晴らしい涼介さんを生んでくれたお母さんに、少しでも感謝の気持ちをお返しできたらいいなと思つてのことだ。

そんなある日の朝。

目を覚ましてスマホを見てみると、『来週のクリスマススイヴの日、何か予定は入っているか？』と涼介さんからメールが入っていた。

クリスマススイヴ……か。ベッドサイドテーブルに置いてある卓上カレンダーに目を向けると、その日は火曜日だった。

週中の平日に予定など入っているわけもなく、かつ習い事のない曜日だから、きついつも通り仕事をして帰るだけだろう。

『おはようございます。返信が遅くなつてごめんさい。何も予定ないです。どうしましたか？』そう返事すると、すぐに『じゃあ、ふたりに食事に行こう』と返ってくる。

ふたりに食事……？ 涼介さん、どうしたんだろう。不思議に思い、何度もその文面を読み返す。

近況報告のためたまに会う約束はしていたものの、まさかクリスマススイヴに誘われるなんて思つてもみなかった。でもきつと深い意味などないはず。空いている日がなくて、その日を指定された

だけだろう。

『わかりました。服装の指定などあったら、言つてください』

何か目的があつての食事会かもしれない。今まで一緒に出かけたのは、友人の集まりや親戚の集まりなど、夫婦で参加しなければいけない何かがあるときだけだった。

『服装の指定はないから、希美の好きな格好で来てくれたらいい』

そう言われたら、逆に困る。何を着ていくか考えなければならぬし、あの素晴らしくイケメンな涼介さんに釣り合う格好をしなければならぬプレッシャーを感じる。

「あの格好よさには、まだ慣れないんだよ……」

結婚して身内になつたとはいえ、会うのは月に一度程度。私服の彼も何度か見たけれど、いつも清潔感があつてセンスのいい服を着ている。しかも上品さが漂つていて、スーツとはまた違う魅力に溢れているのだ。

とにかく彼の期待に応えるべく、満足してもらえる格好をしなければ。服は新調して、それまでに美容院に行つて髪を整えて、ベストコンディションで臨めるように調整しよう。

結婚してから、ふたりに食事をするのは初めて。ちよつと緊張するけれど、もしかしたら離婚を言い出されるかもしれないなんて不安も出てくる。

私たちの結婚生活は、数々の約束の上で成り立っている。その中に、「相手が離婚を申し立てたとき、異議を唱えず速やかに承諾する」というものがある。

籍を入れたれつきとした夫婦である反面、すぐに離婚できる脆い関係なのだ。

離婚を言い渡されてしまえば、この順風満帆の都会ライフが終了してしまう。それだけは避けたいと願いながら、私はクリスマススイヴへの調整を始めるのだった。

* * *

十二月も半ばに入り、寒さが一段と厳しくなってきた。つい今しがた、妻である希美にメールでクリスマススイヴのディナーの誘いをしたところだ。

彼女は俺の妻なのだから、誘うのは不自然じゃない。必要なときは、気軽に呼び出せる存在なはずで、何も間違っていない。

「ふう……」

自宅のベッドの上にスマホを置いて、一度深呼吸をする。

俺——藤ヶ谷源介と鈴木希美は、愛し合っていない偽装結婚をしている。希美は取引先の社員で、毎月定例ミーティングで顔を合わせる仲だった。

彼女は派手すぎず地味すぎず、ちょうどいい感じの華やかさで、清潔感の漂う雰囲気をしている。一目見たときから好印象で、ちゃんとしている女性ということが窺えた。

髪をひとつに纏めているところも、濃すぎないメイクも、香りも、どれも俺の好み。きっとこれらを全て取り払っても可愛いんだろうなと思わせるところがいい。

外見だけでなく、話した感じもよくて、人のことをよく見ている。先回りしていろいろとやって

くれるけれど、押しつけがましくない。同僚たちとの関係も良好そうで、うちの社員たちからも評判がいい。この子がうちの会社にいたら、どんなにいいだろうと思うほど、彼女は魅力に溢れていた。

しかし、それは恋愛感情ではなく、ただひとりの人間として気に入っていた。人として信頼できる——そんな気持ちを抱いていただけだった。

それなのに、ある日突然会社を辞めなければならぬのだと打ち明けられた。実家が厳しく、期日までに結婚相手が見つからなければ、強制的に実家に帰らせて親の決めた相手と結婚させると言われていたらしい。

「今時、そんな家があるんだな……」

時代錯誤もいいと驚いた。

しかし彼女の実家の周りではそれが普通らしい。

早く家庭に入って、子どもを産む。親を大事にしながら、近所や親戚付き合いを密にして、その地域に根付いて生きていく。聞いただけで息が詰まりそうな話で、彼女に心底同情した。

何か力になれないだろうか。いつも世話になっている希美を助きたい。彼女と一緒に仕事をしていると、次はこんなことをして喜ばせたいとか、驚かせたいとか考えて、いろいろなアイデアが浮かんでくる。

できることなら一緒に何かを作っていきたいと思うほど、希美のことを好意的に見ていた。だからこのまま実家に帰らせたくないと思った。

その勢いに任せて、彼女にプロポーズをしたというわけだ。我ながら何てことをしたんだと内心動揺したが、自分の心に嘘はつけない。

それに俺自身、そろそろ身を固めてもいいころだと思っていた。しかし周りにいる女性に、心惹かれるような子はいない。向こうからグイグイ来られると、思惑は何だと洞察して彼女たちの目的を見透かしてしまう。

お金持ちと結婚したい。仕事を辞めて、この人に養ってもらいたい。この人と結婚すれば、周りに自慢できる——中にはハニートラップのようなことを仕掛ける女性もいて、ほとほと疲れてしまった。どこかにいい相手はいないかと探していたところに、希美がいたのだ。

希美は東京でのひとり暮らしをやめたかと思っている。仕事をして自立しているし、誰かに寄りかかって生きていきたいと考えるような人じゃない。俺に媚びたりもしないし、偽装結婚を申し出てもルールを遵守して俺の望むような結婚生活を送ってくれるに違いない。

婚姻関係はあるものの、生活は別。既婚者の肩書を得て、お互いに自由に暮らす。これは両方にとってメリットじゃないかと思った。

「俺が、既婚者か……」

自分の左手薬指に視線を落とすと、そこには希美と一緒に選んだ結婚指輪が嵌っている。シンプルなデザインで、ふたりとも一目でこれがいいと気に入って選んだものだ。そのエピソードを思い出して、ふっと顔が緩む。

希美から了承を得たあとすぐに入籍し、挙式を済ませた。そしてふたりはまた元の生活に戻る。

もともと住んでいたマンションで生活をし、仕事を続け、必要最低限の連絡しか取らず、夫婦で参加しなければならぬイベントだけ共に過ごす。

お互いにライトな関係を築くため、恋愛は自由とした。ただし避妊は必ずすること。婚外子ができたなんてなったら即離婚だと伝えたが、希美はきっぱりと「その心配はない」と言い放った。

年頃の女性なのだから、色恋沙汰のひとつやふたつはあるだろう。それなのに即答とはどうしたことかと驚いた。

……まあ、男性に対していい印象を持っていないようだから、この先恋愛をする気がないだけなのだろうと思っていたが——

先日、懇意にしている別会社の男性社員と話していたときのことだ。仕事の話がいち段落し、コーヒーを飲んでみると相手が前のめり気味で話し始めた。

「グレハティの美人社員ってご存知ですか？」

「……美人社員？」

グレハティは希美の勤める会社だ。すぐに反応しそうになったが、何食わぬ顔で話を続ける。

「グレハティのSNSで……ほら、見てください。この人、綺麗ですよね〜」

彼のスマホで見せてもらったSNSに載っていたのは、新しく発売されるスマートウォッチを紹介している希美の姿だった。

「……めちゃくちゃいいですよ。この優しそうな雰囲気と、頑張ったら振り向いてくれそうない具合の存在感がたまらないですよ」

久しぶりに見た希美は、以前よりも一段と綺麗になつてきている気がした。結婚式のあと、一度顔を合わせたくらいで、ここ最近会っていない。その間に髪が伸びて、しかもゆるく巻いているので雰囲気が変わっていた。

そしてぴたっとしたニットを綺麗に着こなし、胸のラインが何とも色っぽい。露出が少ないのに色っぽいなんて、どういうことだ。スマートウォッチよりも、完全に希美のほうが魅力的に映っている。

「この画像のいいねの数がハンパないですよ。美人すぎるグレハティ社員って話題になつていました。はあ……会つてみたいです。そういえば藤ヶ谷社長の奥様も、グレハティじゃありませんでした？」

顔を引き寄せながら「そうです」と返事をする。目の前の男性は、目を輝かせて俺を見つめた。

「この人を、僕に紹介してもらえませんか!？」

「……はは……」

「お願いします！」

まさかこの女性が俺の妻だとは思つてもみないのだろう。そのあと本当のことを打ち明けて丁重にお断りしたが、俺の妻に「頑張ったら振り向いてくれそう」と言つてしまったことを何度も謝られた。

それだけじゃない。昨日、友人の萩野と飲みに行ったときもそうだ。

萩野は俺たちの結婚式に参加していた男で、若くして会社を立ち上げて成功を収め、一生分の金

を稼いだ今はほぼ遊んで暮らし、独身生活を謳歌している。

そいつから呼び出され、行きつけのバーで飲んでた。

「偽装結婚は順調か？」

「……まあな」

偽装結婚のことを誰にも言うつもりはなかったのだが、萩野に結婚を報告した際に、「お前たち、訳ありだろう」とすぐに見抜かれてしまった。もともと俺に恋人がいないことを知っていたから、急に結婚の報告をしたことで怪しまれるのも仕方ない。

萩野としては「彼女ではないのに妊娠させたのでは？」と勘繰っていたようだったが、まさかの偽装結婚だった。

話を聞いてなぜか「それは面白い！」と萩野は笑った。周囲に絶対に言うなと何度も釘を刺したので、口外してはいけないようだが……定期的に俺たちの関係のことを聞いてくるようになった。

「なあ、あの奥さんに手を出してないの？」

「出すわけがないだろう、籍を入れただけの関係なんだし」

ここで手を出してしまつたら、ややこしくなる。お互いに干渉し合わないライトな関係が良好だからこそ、成り立っているのだ。

「じゃあさ、一度貸してよ。あの奥さん、いい感じにエロいよな」

「はあ？」

こいつもこの前の奴と同じことを言い出した。人の妻を捕まえて「いい感じにエロい」とはな

んだ。

「だってお前ら、恋愛は自由なんだろう？ 他の男と体の関係を結んでもいいと伝えてるって言うってたじゃん」

「そうは言ってるけど、俺の周りでするのは普通に考えてNGだろ。知らないところですからまだしも」

「じゃあ、お前に内緒でちょっかいかけるのはOK？ それもスリルがあつていいかも。燃えそう」

「お前な」

俺の周りの男は何なんだ。希美のを見て「頑張ったら振り向いてくれそう」だとか「いい感じにエロい」だとか。失礼だとは思わないのか。

こいつらが言う通り、希美はいい女だ。容姿もさることながら、中身もいい。俺の親に挨拶をしたときも、女性を見る目が厳しい母親が「この子はとてもいいお嬢さんだ」と絶賛したくらいだ。

それから俺の母親とも定期的に会うようにして、親を安心させるように気遣ってくれている。希美からはその報告がないが、母から「希美ちゃんにいつもありがとうとって伝えておいてね」と感謝のメールが届く。

結婚生活が始まってからは、俺の望んでいた通り全く干渉してこない。俺を取り囲むものに対して、影響を及ぼさないように配慮してくれている。

しかも、社内でも波風がたたないように立ち回っているらしく、希美から引き継がれた担当に、

「奥さんからいい旦那さまだと聞いておりますよ」と言われた。

そんな素敵な女性に対して邪な目を向けるなど、この男どもに腹を立ててしまう。

「とにかくやめろよな」

「あれー。形だけの結婚相手なのに、やけに束縛するなあ。変だな」

「別に束縛じゃない」

これは束縛じゃない。俺の周りで変なことをしないでほしいというだけの話で。旦那の友人と寝ているなんて、ドロドロの不倫ドラマみたいだから、そういうのは遠慮してもらいたい。

「もうすぐクリスマスじゃん？ 希美ちゃん、別の男と過ごすのかもな。不倫って燃えるからなー。相手の男、めっちゃくちや抱くだろうな」

「おい」

「ストーカーみたいな男がいたって言ってたよな。分かるわー、希美ちゃん、ほんといい感じに男がグツとくる雰囲気だし。男が放っておかぬえわ」

「やめろ」

俺の何を煽りたいのか知らないが、悪ふざけがすぎる。楽しそうに話す友人を睨みつけて、ウィスキーを飲み干した。

「なあ、涼介。籍だけじゃ、相手を繋ぎとめられないんだよ。ちゃんと欲しいなら、自分のものにしておかないと誰かに取られるぜ。取られてから気づいても遅いからな」

「何を分かったふうにな……」

「俺はお前のことを分かっているんだよ。お前以上に」
知ったようなことを好き勝手に言ってくれる。確かに萩野とは付き合いは長いが、俺以上に俺のことを分かっていると言われると何だか癪だ。

そのあと俺のことを不機嫌にさせた男は、バーにいた女性客を持ち帰っていった。
俺は好きでもない女を抱くなんて無理だ。あいつと俺は違う。

そう思うのに。

“もうすぐクリスマスじゃん？ 希美ちゃん、別の男と過ごすのかもな。不倫って燃えるからなー。相手の男、めっちゃくちや抱くだろうな”

その言葉が頭から消えず、知らない男に抱かれている希美を想像して沸々と嫌悪感が湧き上がる。俺以外の男の前で、幸せそうに微笑んでいるところや、とろけた顔をしていることを想像するだけで不愉快になる。抱かれているなんて、もってのほか。

俺たちは偽装夫婦だ。お互いに干渉しないし、他の人と恋愛してもいい。そう決めたのに、この胸に渦巻く変な感情は何だ。

「はつきりさせてやる」

正体不明の胸のモヤモヤをなくすために、夜中にもかかわらず希美へメールを送った。

『来週のクリスマスイヴの日、何か予定は入っているか？』と。

3

子どもの頃はクリスマスシーズンになると、指折り数えてワクワクと胸を弾ませていた。サンタさんからプレゼントをもらえるし、家族でチキンやケーキを食べてパーティーができる。

その日だけはノンアルコールのシャンパンを飲んでもよくて、大人になったような気持ちを味わえた。

でもいつからかクリスマスが待ち遠しくなくなって、いつもと変わらない日と同じ過ごし方をするようになった。

仕事で忙しい時期な上に一緒に過ごす恋人もいない。しいて言うなら、毎年イヴの夜中にやっているバラエティー番組を見ながら、ひとりでお酒を飲むくらい。

浮かれている街や人を見て、他人事のように感じていた。

「それなのに、今年は……！」

既婚者になっている上に、その旦那と一緒にクリスマスディナーを食べることになってしまった。相手に失礼に思われない格好をするため、この前の週末は百貨店に服を買いに行った。

どういった店で食事をするか分からないけど、涼介さんのことだからそれなりのお店に行くに違いない。